

玄応撰『一切経音義』諸本の研究

李  
乃  
琦

# A study of the various manuscripts of the *Yiqiejingyinyi* 一切經音義

Li Naiqi

This thesis deals with the ancient manuscripts of the *Yiqiejingyinyi* in Japan, and examines the relationship and systematic classification of the manuscripts according to the differences in annotations.

The *Yiqiejingyinyi* was compiled in the Tang dynasty, with a total of 25 volumes and about 10,000 entries. The *Yiqiejingyinyi* is the oldest existing Buddhist dictionary, reflecting the pronunciation of the early Tang dynasty, and contains more than 450 Buddhist scriptures, which gives us an idea of the types and contents of Buddhist scriptures that were in circulation at that time.

The *Yiqiejingyinyi* contains mainly Japanese manuscripts and Chinese printed books. There are also fragments of ancient manuscripts from Dunhuang in France, England, Germany and Russia.

After the arrival of *Yiqiejingyinyi* in Japan, it was widely copied. There are at least two possible lineages of late Heian period 平安後期 manuscripts of the *Yiqiejingyinyi* extant in Japan. Although previous studies have clarified the systematic classification of individual volumes, the systematic classification of the whole of the Japanese manuscripts of the *Yiqiejingyinyi*, including other volumes, remains unresolved.

In this paper, we first study the Goryeo 高麗 manuscripts and the existing Japanese manuscripts of the *Yiqiejingyinyi*, and compare the annotations that differ between the various manuscripts. Finally, based on the aggregation and analysis of the differences, we will attempt to infer the relationship between the manuscripts and their systematic classification.

# 玄応撰『一切経音義』諸本の研究

李 乃 琦

## 一 はじめに

玄応撰『一切経音義』（以下、「玄応音義」と略す）は中国に現存する最古の仏典音義である。唐代に玄奘はインドから大量の仏典を将来した。それらの仏典を翻訳するために、長安に「訳場」を設け、僧侶の中から知識人を選んだが、その中でも玄応は唯一の「字学大徳」であった。玄応は仏典に難字難語が多数存在することを意識し、仏典翻訳に並行して「一切経」の音義の編纂を行った。それがいわゆる玄応音義であり、全二十五巻で約四十万字、四百五十部以上の仏経経目と一万近くの項目が収録されている。<sup>①</sup>玄応音義は後代の仏典音義に大きな影響を与えた。その影響は中国にとどまらず、奈良時代に日本に伝来して盛んに書写され、平安時代以降の辞書編纂に際しては頻繁に利用された。日本に現存する玄応音義古写本は残巻数と内容において多少異なるものの、幾つかの系統に分けられると想定される。本論文では、日本に現存する玄応音義古写本に着目し、注文の異同に基づき、諸本の系統分類を試みる。

## 二 先行研究

一 山田（一九三二）は日本古写本の大治本が宋版系ではなく、高麗本系であることを指摘した。さらに巻第一について諸本対照結果を示し、大治本には高麗本系よりも古い玄応音義の本文が残っていることを明らかにした。<sup>⑤</sup>

二 上田（一九八二）は玄応音義の日本古写本（大治本、正倉院本、広島大学蔵本、天理図書館本、高麗蔵経本）と中国版本（磧砂蔵経本、叢書集成所収本、慧琳音義所拠本）とを比較し、日本古写本・敦煌本が同じ系統に属するのに対し、宋版は別の系統に属する。<sup>⑥</sup>

三 箕浦（二〇〇六）は金剛寺本・七寺本・東京大学本・西方寺本の書誌情報について説明している。その中では金剛寺本が大治本に近く、七寺本が高麗本に近いことを指摘した。また、西方寺本が他の写本より石山寺本に近いことも指摘した。ただし、上に挙げた諸本の親疎関係については特に根拠を示していない。<sup>⑦</sup>

四 佐々木（二〇一四）は二〇〇六年に公開された五種類の写本も含めた玄

応音義卷第五における本文と目録との経名不一致について論じ、現存する玄  
応音義卷第五の経名から見た場合、日本古写本は高麗本に近く、宋版はそれ  
と遠いことを指摘した。さらに、現存する卷第五に、目録と本文の経名とが  
一致するものはないことについて、各巻目録が音義本文と独立して書写され  
たためと説明づけた。<sup>⑧</sup>

以上、これまでの研究により、玄応音義の日本写本と中国版本が別々の系  
統に属することが明らかになった。また、個別の巻の系統分類については、  
これらの先行研究により解明されたが、他の巻も含めた玄応音義日本古写本  
全体を対象とした系統分類は未解決のままである。本論では、玄応音義の親  
疎関係を推定するにあたり、「一切経音義全文データベース」<sup>⑨</sup>を構築し、詳  
細に照合していきたい。

### 三 一切経音義諸本

#### 一 現存する玄応音義日本古写本

本論では、完本である高麗本と日本に現存する玄応音義古写本を研究対象  
とする。利用している諸本は次のとおりである。

- (一) 高麗本…(全二十五巻、『高麗大蔵経』、東国大学校、一九七六年)<sup>⑩</sup>
- (二) 金剛寺本…金剛寺蔵本(鎌倉時代書写。巻第一～四、六、七、九～二十  
一、二十四、二十五の計二十一巻が現存する。<sup>⑪</sup>)
- (三) 七寺本…七寺蔵本(平安時代書写。巻第一～十、十二～十四、十六～十八、

二十一、二十三～二十五の計二十巻が現存している。また、巻第十五は東京  
大学史料編纂所に所蔵されているので、合わせて二十一巻現存する。<sup>⑫</sup>)

- (四) 大治本…宮内庁書陵部蔵本(平安時代書写。巻第一、二、九～二十五の  
計十九巻が現存する。<sup>⑬</sup>)

- (五) 西方寺本…西方寺蔵本(三分の二が平安時代、三分の一が鎌倉時代の書  
写。巻第一、三～六、九、十三、二十一、二十五の計九巻が現存する。<sup>⑭</sup>)

- (六) 広島大学本…石山寺蔵本(平安時代書写。巻第二～五、十の五巻が現存  
する。石山寺本の一部である。<sup>⑮</sup>)

- (七) 天理図書館本…天理図書館蔵本(巻第九、第十八現存する。巻第九が院  
政期の写本、石山寺本の一本である。巻第十八が鎌倉時代の写本である。<sup>⑯</sup>)

- (八) 京都大学本…石山寺蔵本(巻第六、七が現存する。石山寺本の一部で  
ある。<sup>⑰</sup>)

- (九) 東京大学本…七寺本蔵本(巻第十五のみ現存する。七寺一切経の一部  
である。<sup>⑱</sup>)

他に、正倉院本玄応音義(正倉院聖語蔵本)を参考資料とする。

#### 二 玄応音義の構成

玄応音義各巻の最初に「一切経音義卷第〇」の形式で巻を表し、その後の  
目録で、この巻に各経に配された経名の全体を見渡せる。その後の本文に各  
経の経名・掲出語・注文が続く構成になっている。

次に一例の項目を挙げる。

古文作斲、同。竹角反。《說文》…斲、斲也。斲、斤也。

この例では、傍線部分が字体注、波線部分が音注、二重傍線部分が義注である。玄応音義の掲出語は主に二字熟語で、その中の一字のみ注を施す場合でも掲出語は二字とする。字体注は主に字形を弁別し、古字・異体字・通字も明記する。また、經典原文の用字の正俗も分別している。音注は主に反切で表すが、類音注を使う場合もある。多数の発音がある字については、別々に音注を記している。義注は主に典籍に依拠して引用するものである。多数の意義がある場合、別々に対応する義注を記載する。

以上により、現存する玄応音義古写本の各巻項目数が表1のように示す。

表1を見ると、諸本の項目数には多少の差がある。例えば、巻第一の金剛寺本と大治本は他本より三〇〇以上の項目が存する。巻第十五の項目数が最も多いのは高麗本の四〇四項目であり、最も少ないのは金剛寺本と大治本の三三三項目である。巻第十八では、高麗本と七寺本が三三八項目であり、残りの金剛寺本・大治本・天理本が三一二項目前後である。また、巻第二十二において、大治本では五五二項目ある一方で、高麗本には四九一項目しかなく、両者の差は六〇項目に近い。

以上のように、玄応音義日本古写本には巻ごとに残巻本、項目数ともに大きな差があるので、全体的に検討するのは不適切だと思われる。そのため、以下では、巻ごとに日本古写本の親疎関係と異文分類を論じる。

表1 玄応音義日本古写本の現存項目数<sup>(20)</sup>

巻数	麗	金	七	大	西	広	京	天	東
一	407	806	405	807	290*				
二	442	441	440	441		441			
三	387	383*	388		235*	403			
四	485	484	485		484	484			
五	489		488		418*	472			
六	429	428	429		191*		438		
七	422	422	422				422		
八	410		410						
九	287	286	287	286	150*			286	
十	223	222	223	222					
十一	369	370		370					
十二	386	381	384	380					
十三	369	369	369	369	268*				
十四	384	384	384	384					
十五	404	333		333					334
十六	306	306	306	306					
十七	284	282	284	282					
十八	338	312	338	312				313	
十九	293	292		290					
二十	472	471		471					
二十一	304	304	304	305	107*				
二十二	491			552					
二十三	379		379	379					
二十四	295	294	295	294					
二十五	260	259	260	259	259				
計	9315	7446	7280	7042	2402	1800	860	599	334

空白：その巻が現存していない。 ※：その巻が残巻であるため、一部分の内容が存しない。

四 玄応音義日本古写本の親疎関係

本章では玄応音義の全二十五巻を巻ごとに分析する。検討の順序としては、まず、諸本の注文を対照し、異同のある項目数を計算する。次に、記号でこれらの異文を分類して、諸本の系統を推定する。本論では、完本の高麗本を基準として○類と記し、高麗本と一致する注文も○類とする。高麗本と一致しない注文を他本同士で一致する数の多いものから△、◎類とする。次に一例を挙げる。

例二 〈釜鍔〉 卷第十八 立世阿毗曇論

高麗本…方目、甫救二反。《方言》鍔或謂之𦵏。《説文》鍔如釜而口大。

《三蒼》鍔、小釜也。𦵏音歷。(○類)

金剛寺本…大治本・天理本…方目、甫救二反。《方言》鍔或謂之、鍔如

釜而口大。《三蒼》鍔、小釜也。𦵏。(△類)

七寺本…方目、甫救二反。《方言》鍔或謂之、鍔如釜而口大。《三蒼》鍔、

小釜也。(◎類)

最後に、玄応音義異文の比較を行うために、諸本で五種類以上残巻している十巻を選定する。その十巻は巻第一(五種)、巻第二(五種)、巻第三(五種)、巻第四(六種)、巻第六(五種)、巻第九(六種)、巻第十三(五種)、巻第十八(五種)、巻第二十一(五種)、巻第二十五(五種)である。また、巻ごとに一致率の高い順の三位まで分析する。

1 巻第一

種類	高麗本	金剛寺本	七寺本	西方寺本	大治本	計
一	○	△	○	○	△	352
二	○	△	○	△	△	33
三	○	△	○	◎	△	21

諸本の中で、『新華嚴經音義』が記されているのは大治本と金剛寺本のみで、他の諸本には一切見られない。全体から見ると、高麗本と七寺本の一致率が高く、金剛寺本は大治本に近い。西方寺本はどちらとも近いとは言えない。

2 巻第二

種類	高麗本	金剛寺本	七寺本	大治本	広大本	計
一	○	△	○	△	◎	21
二	○	△	◎	△	◎	19
三	○	△	△	△	◎	17

巻第二では、金剛寺本と大治本がほぼ一致する。広大本が他の系統と一致する内容があるのに対して、異なる注文も多数ある。また、七寺本がどの系統に属するかは判断しがたい。

### 3 卷第三

種類	高麗本	金剛寺本	七寺本	西方寺本	広大本	計
一	○	△	○	△	△	26
二	○	◎	○	△	△	18
三	○	△	○	欠	△	11

卷第三では高麗本と七寺本の一致率が高く、また金剛寺本には見られ、諸本に見られない注文が多少ある。また、西方寺本は欠ける部分を除き、広大本と近い。

### 4 卷第四<sup>21</sup>

種類	高麗本	金剛寺本	七寺本	西方寺本	広大本	計
一	○	△	○	△	△	54
二	○	△	◎	△	△	6
三	○	◎	○	△	△	6

種類一の場合が一番多く、五四例である。これは異同のある注文全九四例の約五七%を占めている。これによって、高麗本と七寺本が同じ系統の写本であると推測できる。また、七寺本と金剛寺本に多少の異文が存する。

### 5 卷第六

種類	高麗本	金剛寺本	七寺本	西方寺本	京大本	計
一	○	○	○	欠	△	27
二	○	△	△	欠	◎	14
三	○	△	△	△	○	11

卷第六では、「旃檀」「瞻察」「純一」「懈怠」「族姓」「蕭笛」六つの見出しが正倉院本と京大本のみにあり、他の諸本にはないので、正倉院本と京大本が同じ祖本によって成立したことが推測できる。それ以外、京大本に見られ、他本にない注文も少なくない。また、西方寺本が残巻なので、照合できない項目も多くある。

### 6 卷第九

種類	高麗本	金剛寺本	七寺本	西方寺本	大治本	天理本	計
一	○	△	○	◎	△	◎	28
二	○	○	○	△	○	△	12
三	○	○	○	欠	○	△	10

卷第九では、高麗本と七寺本が近く、金剛寺本と大治本が近い。また、大治本と金剛寺本本にあり、他本にない注文が多数存する。西方寺本と天理本

が対応する項目が多数存する。

# 7 卷第十三

種類	高麗本	金剛寺本	七寺本	西方寺本	大治本	計
一	○	△	○	◎	△	33
二	○	△	○	欠	△	21
三	○	△	○	△	△	19

卷第十三では、高麗本と七寺本、金剛寺本と大治本の一致する項目が圧倒的に多く、西方寺本に多数の独立異文が見られる。

# 8 卷第十八

種類	高麗本	金剛寺本	七寺本	大治本	天理本	計
一	○	△	△	△	△	43
二	○	△	△	△	◎	9
三	○	△	○	△	△	2

卷第十八では、高麗本には見られ、他本に見られない注文が圧倒的に多い。また、天理本にも独立の異文も九項目ある。高麗本が一種類の系統に属し、残りの四本が別の系統に属すると考えられる。

# 9 卷第二十一

種類	高麗本	金剛寺本	七寺本	西方寺本	大治本	計
一	○	△	△	欠	△	22
二	○	△	△	△	△	15
三	○	◎	○	△	△	9

卷第二十一では、西方寺本が残卷なので、対照する項目数が少ない。それらのうち、ほぼ金剛寺・七寺本・西方寺本・大治本と一致する。また、金剛寺本に少数の独立異文が存する。卷第二十一のみ考察すれば、高麗本と他本が同じ系統に属するとは言いがたい。

# 10 卷第二十五

種類	高麗本	金剛寺本	七寺本	西方寺本	大治本	計
一	○	△	△	△	△	37
二	○	○	○	△	○	24
三	○	○	△	○	○	23

卷第二十五では、諸本の親疎関係が明らかに見られない。その中で、高麗本が諸本と異なる項目数が三七例に及ぶ。また、西方寺本と七寺本の独立異文も二〇例以上ある。そのため、卷第二十五において、諸本が別々の系統に



属すると推測する。

以上の各巻の分類表により、玄応音義日本古写本の親疎関係は次のようにまとめられる。

① 金剛寺本と大治本が対応する全十七巻のうち、異同のある注文が少数あるが、全体として、他の諸本より両者が近いと考えられる。特に、巻第一の巻末の『新華嚴經音義』は金剛寺本と大治本のみにあり、他本に見られない。

② 一一七四～一一七五年に石山寺で書写された『石山寺一切經』については、広島大学と天理図書館に数巻が所蔵されている。張氏（二〇〇六）では、京大本表紙に続く巻首の初行に「石山寺一切經」の無廓墨印が捺され、『石山寺一切經』の一部分であるとしている<sup>22</sup>。さらに、西方寺本は石山寺本との一致率が高く、同じ系統に属すると推測できる。

③ 高麗本には諸本と異同のある注文が多数見られる。さらに、注文の字数において、諸本より多いため、独立性を持つ写本と考えられる。

④ 七寺本の全二十巻を考察すると、その中巻第一、巻第三、巻第四、巻第五、巻第七～巻第十、巻第十三、巻第十四が高麗本と近く、巻第十二、巻第十七、巻第十八、巻第二十一、巻第二十三～巻第二十五が金剛寺本と大治本に近い。巻第二、巻第六、巻第十六が高麗本と一致する注文もあるし、金剛寺本・大治本と相似する内容も存する。その例を下に挙げる。

例三 〈丘慈〉 巻第四

高麗本・七寺本…或言龜茲、正言屈支也。屈音居勿反。多出龍馬。《左傳》云屈産之乘也。

金剛寺本・西方寺本・広島大学本…或言龜茲、正言屈支也。屈音居勿反。多出龍馬。

例四 〈蜎飛〉 巻第十六

高麗本…一全反。《字林》蟲兒也。或作蠓、古文翹、同。呼全反。飛兒也。《爾雅》井中小赤蟲也。

七寺本・金剛寺本・大治本…一全反。《字林》蟲兒也。或作蠓、古文翹、同。呼全反。飛兒也。

七寺本の系統分類を究明するために、諸本の書写形式を表2のように分類した。玄応音義の書写形式は大きく分けて二つである。見出しに続いて、空白を置かずに、注釈が同じ大きさの文字で記される形式を「項単注単」とす

表2 玄応音義日本古写本の書写形式

項単注単		項単注双
高麗本	大治本・広大本・東大本	
金剛寺本巻第六、九、十、十一、二十四	天理本・西方寺本	
七寺本巻第一～十、十三、十四	金剛寺本巻第一～四、七、十二、二十一、二十五	
京大本巻第六	七寺本巻第十二、十六～十八、二十一、二十三～二十五	
	京大本巻第七	

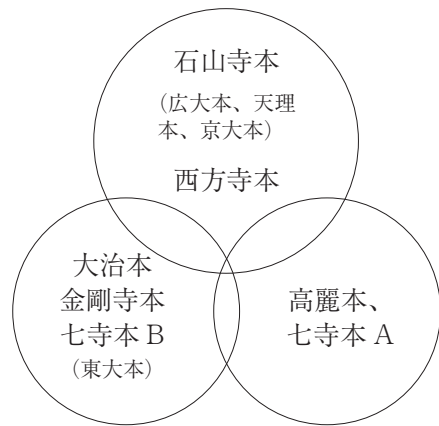


図1 玄応音義日本古写本の系統分類

る。これに対し、見出しは一行で、注釈は小字双行の割注形式で記される形式を「項単注双」とする。  
表2を見ると、七寺本が巻によって、書写形式が異なっている。書写形式の異同という観点から、七寺本と諸本の親疎関係を対照した結果、興味深い事実が明らかとなった。すなわち、七寺本では、巻により書写形式が異なるだけでなく、それと

もに内容的に近しい写本も異なっている。これにより、七寺本が書写された時一種類以上の依拠本があったと推測できる。七寺本の成立経緯を推測すれば、二つの可能性が類推される。

・まず、当時七寺に所蔵されている玄応音義音義は完本ではなく、残巻である。欠けている部分が、他の一種類の玄応音義を利用して補足されたために、二種の系統が混合することになった。

・あるいは、七寺に伝来した玄応音義がそもそも取り合わせ本であり、元から二つの系統の写本を組み合わせて作られた玄応音義であった。

いずれにしろ、先行研究では指摘されることがなかったが、系統の分類に際しては、書写形式にも注目するべきであろう。

以上をまとめると、玄応音義日本古写本には主に三つの系統があると言える。(そのうち、七寺本Aは巻第一～巻第十、巻第十三、巻第十四である。七寺本Bは巻第十二、巻第十六～巻第十八、巻第二十一、巻第二十三～巻第二十五である。)

表3 玄応音義日本古写本の異文数

異文数	巻数	異文数	巻数
141	十四	432	一
75	十五	93	二
83	十六	121	三
115	十七	94	四
123	十八	161	五
99	十九	126	六
143	二十	119	七
115	二十一	35	八
109	二十二	133	九
124	二十三	86	十
93	二十四	133	十一
104	二十五	143	十二
		95	十三

## 五 玄応音義日本古写本の異文分類

以上によって、玄応音義日本古写本を巻ごとに親疎関係を検討した。それらのうち、注文には異同のある内容について、さらに分析する。

### 1 全文の異文数

玄応音義全文の異文数を次の表3のように示す。

表3から見ると、異文数が最も多いのは巻第一の四三二項目であり、最も少ないのは巻第八の三五項目である。それらを見ると、玄応音義諸本の間、異なる項目がかなり多いことが明らかになった。次に、玄応音義の異文を用字の異同と字数の異同の二種類に分けて論じる。また、字数の異同において、

一字の異同と二字以上の異同の二つのパターンに分類する。

## 2 用字の異同

用字の異同とは、玄応音義諸本には注文がほぼ一致しているが、それらのうち、注文の用字が異なる項目である。次の一例を挙げる。

### 例五 〈明哲〉 卷第十 地持論

高麗本・七寺本…又作喆、慙二形、同。知列反。《爾雅》哲、智也。《方言》齊、宋之間謂智爲哲。哲、明了也。

金剛寺本・大治本…又作喆、慙二形、同。知列反。《爾雅》哲、智也。《方言》齊、宋之間謂知爲哲。哲、明了也。

例五のように、傍線部の注文が高麗本・七寺本では「智」とし、金剛寺本・大治本では「知」とする。この例では、誤写である可能性があるが、また当時、「智」と「知」の両字が共通して使われると考えられる。

## 3 字数の異同（一字）

字数の異同（一字）とは、諸本の注文において、字数の差があり、またこの差が一字の場合である。次に一例を挙げる。

### 例六 〈加祐〉 卷第二十一 稱讚淨土經

高麗本…古文閣、佑二形、同。胡救反。《字林》祐者、也。

西方寺本・七寺本…古文閣、佑二形、同。胡救反。《字林》祐者、助也。金剛寺本・大治本…古文閣、依二形、同。胡救反。《字林》祐者、助也。

例六では、《字林》からの引用部分を考察すると、高麗本が「祐者、也。」であり、残りの四本が「祐者、助也。」である。この一例では「祐」に関する説明であるため、《字林》の「祐者」には説明の注文があるはずである。それにより、高麗本の「祐者、也。」には「助」の一字が脱落していると推測される。

## 4 字数の異同（二字以上）

字数の異同において、一字の場合、誤写誤脱の可能性が高いため、本論では、字数の異同（二字以上）を字数の異同（一字）と別々に検討する。次に、その一例を挙げる。

### 例七 〈怛策〉 卷第二十三 廣百論

大治本…迦都達反。此龍王名也。

高麗本・七寺本…迦都達反。龍王名也。昔有仙人曾咒此龍、令其入火、龍王憂怖、遂投帝釋、繞座而住。仙人知己、更以咒之、帝釋與龍一時俱墮。帝釋求哀、得免所患、龍遂死焉。

例七では、傍線部の注文は高麗本・七寺本に見られるが、大治本には見ら

れない。さらに、異同のある部分が二字以上である。この例では、「怛策」の意味に関して、大治本では「此龍王名也。」であり、高麗本と七寺本ではそれだけでなく、「怛策」の由来も記述している。これらの部分が後人の増訂であるか、あるいは祖本にあるが後代で省略されたかは検討する余地がある。

また、同じ巻においても、異同のある注文がいくつかのパターンに分けられる。次に、巻第二を例として論じる。異同のある注文を分析する。

#### ① 増訂

##### 例八 〈習習〉 巻第二 大般涅槃經

高麗本・七寺本・広大本…經文從广作瘡、書無此字、近人迦之耳。

金剛寺本・大治本…經文從广作瘡、書無此字、近人加之耳。和言加由之系統の異同

##### 例九 〈怡懌〉 巻第二 大般涅槃經

高麗本…音以之反。《爾雅》怡、懌、樂也。郭璞曰怡、心之樂也。懌、意解之樂也。

七寺本…音。怡、懌、樂也。郭璞曰怡、心之樂也。懌、意解之樂也。

金剛寺本・大治本・広大本…音亦。《爾雅》怡、懌、樂也。郭璞曰怡、心之樂也。懌、意解之樂也。

#### ③ 誤写誤脱

##### 例十 〈娑羅〉 巻第二 大般涅槃經

高麗本・七寺本…《泥洹經》作固林。案《西域記》云此樹在呾刺拏河西岸、不遠有娑羅林。其樹形類榭而皮青白、葉甚光潤。四樹特高、是如來涅槃之所也。

金剛寺本・大治本…《泥洹經》作堅固林。案《西域記》云此樹在呾刺拏河西岸、不遠有娑羅林。其樹形類榭而皮青白、葉甚光潤。四樹特高、是如來涅槃之所也。

広大本…《泥洹經》作堅固林。案《西域記》云此樹在呾刺拏河西岸、不遠有娑羅林。其樹形類榭而皮青白、葉甚光潤。四樹特高、是如來涅槃之所也。

#### ④ 省略・増訂の判断保留

##### 例十一 〈規欲〉 巻第二 大般涅槃經

高麗本・七寺本…又作類、同。九吹反。規、計也。規亦求。謂以法取之也。

金剛寺本・大治本…又作類、同。九吹反。規、計也。規亦求。謂以法取之也。字從夫見言丈夫之見、必合規矩。

広大本…又作類、同。九吹反。規、計也。規亦求也。謂法取之也。字從夫言丈夫之見、女合規矩。

#### 六 おわりに

本論では、玄応音義日本古写本に着目し、諸本の注文を通して、系統分類を試みた。結論としては、次のようにまとめられる。

(一) 玄応音義日本古写本には異文数が多数あることがわかった

(二) 諸本の異文において、用字と字数(二字)の異同が圧倒的に多い。これらの異同については、系統分類によって成立する可能性があるが、また誤写誤脱の場合も存すると推測する。

(三) 字数(二字以上)の異同が玄応音義全巻にあるが、異文数の多さから

は、玄応音義には増訂本が存する可能性が示唆される。

(四) 諸本の類似性から、異文をいくつかの種類に分類できる。高麗本と七寺本A(巻第一～巻第十、巻第十三、巻第十四)との一致率が多く、同じ系統に属する。また、残りの金剛寺本・大治本・西方寺本・石山寺本には独立異文が見られるが、一致率から見ると、金剛寺本と大治本、西方寺本と石山寺本が別々の系統に属すると考えられる。残りの七寺本B(巻第十二、巻第十六～巻第十八、巻第二十一、巻第二十三～巻第二十五)が金剛寺本・大治本系統に属する。

以上により、玄応音義諸本の系統分類が明らかになった。今後の課題として、日本の古辞書編纂における根幹資料として、どの系統の玄応音義が利用されたかについて検討したい。

## 注

- (1) 徐時儀『玄応衆経音義研究』(中華書局、二〇〇五年)
- (2) 窺基『法華音訓』、雲公『大般涅槃經音義』、慧琳『一切経音義』など。
- (3) 石田茂作『写経より見たる奈良朝佛教の研究』(東洋文庫、一九三〇年)
- (4) 池田証壽『図書寮本類聚名義抄と玄応音義との関係について』(『国語国文研究』八十八号、一九九一年)
- (5) 山田孝雄『一切経音義刊行の顛末』(『一切経音義二十五巻』、西東書房、一九三二年)
- (6) 上田正『玄応音義諸本論考』(『東洋学報』第六十三巻第一・二号、一九三二年)
- (7) 箕浦尚美『金剛寺本・七寺本・東京大学資料編纂所・西方寺蔵玄応撰『一切経音義』について』(『日本古写経善本業刊第一輯「玄応撰一切経音義二十五巻」』、

国際佛教学大学院大学学術フロンティア実行委員会、二〇〇六年)

(8) 佐々木勇「玄應撰『一切経音義』巻第五における本文と目録との経名不一致について」(『訓点語と訓点資料』一三三号、二〇一四年)

(9) 筆者は現在「一切経音義全文データベース」を構築している。構築するに際して利用した玄応音義諸本は次の通りである。大治本・金剛寺本・西方寺本・高麗本・七寺本・正倉院本・東京大学本・京都大学本・広島大学本・天理図書館本。本論文で検討する内容は「一切経音義全文データベース」の一部分である。徐時儀氏が公開しているオンラインのデータベースは、版本に基づくもので、日本古写本・敦煌本・トルファン本との校勘がなく、これを補完することを意図している。

(10) 高麗蔵経本(『高麗大藏經初刻本輯刊』、西南師範大学出版社、人民出版社、二〇一二年参照)

(11) 大阪金剛寺蔵本(『日本古写経善本業刊第一輯「玄応撰一切経音義二十五巻」』、国際佛教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編集発行、二〇〇六年)

(12) 名古屋七寺蔵本(同上)

(13) 大治三年蔵本(『古辞書音義集成「一切経音義」』、汲古書院、一九八一年)

(14) 西方寺蔵本(『日本古写経善本業刊第一輯「玄応撰一切経音義二十五巻」』、

国際佛教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編集発行、二〇〇六年)

(15) 広島大学蔵本(『古辞書音義集成「一切経音義」』、汲古書院、一九八一年)

(16) 天理図書館本(同上)

(17) 京都大学蔵本(『日本古写経善本業刊第一輯「玄応撰一切経音義二十五巻」』、国際佛教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編集発行、二〇〇六年)

(18) 東京大学蔵本(同上)

(19) 正倉院聖語蔵本…平安時代書写。巻四、六(天平写経、残巻)、十七(二十二が現存する。『一切経音義二十五巻』、西東書房、一九三二年)

(20) 玄応音義古写本の残巻数を巻ごとにまとめ、次のとおりである。巻第一(五

種)、卷第二(五種)、卷第三(五種)、卷第四(六種)、卷第五(四種)、卷第六(五種)、卷第七(四種)、卷第八(二種)、卷第九(六種)、卷第十(四種)、卷第十一(三種)、卷第十二(四種)、卷第十三(五種)、卷第十四(四種)、卷第十五(四種)、卷第十六(四種)、卷第十七(四種)、卷第十八(五種)、卷第十九(三種)、卷第二十(三種)、卷第二十一(五種)、卷第二十二(二種)、卷第二十三(三種)、卷第二十四(四種)、卷第二十五(五種)。

(21) 李乃琦「図書寮本『類聚名義抄』における玄応撰『一切経音義』の依拠テキスト―『一切経音義』巻第四を中心に―」(『訓点語と訓点資料』第一三七輯、二〇一六年)

(22) 張娜麗「京都大学文学部国語学国文学研究室蔵玄応撰『一切経音義』について」(『日本古写経善本業刊第一輯「玄応撰一切経音義二十五巻」』、国際佛教学大学院大学学術フロンティア実行委員会、二〇〇六年)

#### 【付記】

二〇一八年から、天野山金剛寺座主堀智真師、七寺住職蟹江良輝師ならびに国際仏教学大学院大学日本古写経研究所の御厚意で原本調査の機会に恵まれた。調査時に、調査団の先生方の御指導をいただいた。本稿は二〇一六年十月に奈良女子大学にて開催された日本中国学会第六八回大会、二〇一九年五月に国際仏教学大学院大学にて開催された国際仏教学大学院大学公開研究会における口頭発表を改稿したものである。当日は先生方から、有益なご意見をいただき、不備を修正することができた。記して感謝申し上げる。